

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

万葉の川心 第34回

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

雲を詠める（巻第七 一〇八七番歌）

あなしがは
痛足河河波立ちぬ

まきもく
巻目の齋槻が嶽に雲あ立てる

幼い頃、習い事に通うのは面倒だった。だが、大人になって始める習い事は面白い。久しぶりに「生徒」になって、全く知らない世界に足を踏み入れていく。同じ教室にいる仲間は老若男女様々。競うことも比べることも必要ない。先生の話には素直にうなずき、しかし実際は少々のアレンジを加える。多少の失敗は作品の味となる。「趣があつていいね」と誉められれば、それがお世辞だろうと知りつつにんまりとしてしまふ。いずれ個展でも開けるか、はたまたこの道で大成するかなどと大それた錯覚に酔う。「夢」でいいのだ。もう何かを実現するために躍起になる若さとは違う。また新しい夢が見られた。だから、実現への過程を少しずつ楽しんでいこう。ひとつずつ作品を増やしていく。ひとつずつできるようになっていく。その途中が楽しみなのだ。この歳になって分かってきた。さながら先を急がぬ各駅停車の旅のようだ。目的地に着かなくてもいいではないか。そうすれば夢はいつまでも続いていく。

この碑を見つけるのに一時間かかった。痛足川は奈良県桜井市大字穴師を流れる巻向川である。小雨の降るなか何度も行き過ぎては戻り、ようやく竹藪の中にひっそりと隠れている碑を見つけた。棟方志功書で、他の碑とは一風変わって独特の勢いと、構図の大胆さを感じられる。すぐ後ろで川は、清々しい音を立てて流れている。「痛足川に川波が立っている。巻目の弓月が嶽に雲がわき上がっているらしい。」柿本人麿が詠んだ弓月が嶽に雲が立ち渡る歌が、万葉集

に二首並んで収められている。川波というと、川面に立つさざ波のように感じてしまいが、昔は川音を豪快に立てて、恐ろしいまでの勢いで波が立っていたに違いない。さすればその源の美しい山並みには荘厳なまでに雲が立ち上っているであろう。雲はまさに次々に形を変え、雨を呼ぶ。風、川音、水温、色、流れを全身で感じ、上流の山を思う。人の心はそれに留まらない。霧に愛しい彼女のため息を見る。霞につかみきれない恋心を重ねる。霜、露、雨、雪、かざろひ、それらは心の琴線をせつなく揺らし、歌を奏でる。万葉の人々だけではない。人は誰もが詩人である。誰でも「表現したい心」が渦巻いている。今は少し忘れているかもしれない。あるいはいほんなことを知りすぎて、表に出すことに照れているかもしれない。けれど、自分を磨き、自分さえ知らなかった新しい自分を知りたい、感じたことを表現したいという気持ちは何歳でもいつでもあるのではないだろうか。「自然」のなかに身を置いて、素のままに感じたことを出せる何か、自分を解き放てる何かに出合った人は幸いだ、この碑を見ていてそう思う。

「ぼつつとして何を考えているの。」
連れが聞く。

これから先の、
残りの人生をどう
過ごしていい
うかと。

「残りなんて寂しいな。おまけの人生だと思っただら。」

そうか。そして
たら何でも始められそうだ。昔、
キラメルより
楽しみだったっけ。いつでも今日より先は「おまけの人生」。



奈良県桜井市車谷 巻向川のほとりにて